

# 多部族国家と複数政党制

——コートジボワールの場合——

はら ぐち たけ ひこ  
原 口 武 彦

はじめに

- I 1990年選挙とその開票結果
  - II PDCI と部族主義
  - III FPI 台頭の意味
- 結 語

本稿では、これらの問題を独立以来、一党制を堅持し政治的安定を享受してきたコートジボワールの場合について考えてみたい。

(注1) サハラ以南全体の動きについては、『アフリカレポート』第11号 1990年9月を参照のこと。

はじめに

1989年後半以降、サハラ以南のアフリカでも多くの国々でいわゆる政治的民主化を求める動きが顕在化し、活発になった。それまで一党制ないしは軍政のもとで政治的にはそれなりの安定を保ってきた国々で、複数政党制への移行を要求する反政府運動が台頭し、既存の体制を揺がしはじめたのである(注1)。そこには明らかにソ連・東欧諸国の政治的激動の衝撃、影響を読みとることができる。しかし、その衝撃・影響を受けたにしても、それに連動するようなかたちで政治的民主化の動きが、アフリカ諸国で台頭し既存の体制を脅やかすまでの力を獲得するに至るには、これらの諸国にそれを必然化する状況が準備されていたはずである。

政治的民主化の要求は、それらの国々において、どのような状況のもとで現実的な力を獲得することができたのか。またこの政治的民主化の動きは、それぞれの国の経済発展の過程で生成されてきたいかなる階層、集団の台頭を意味しているのであろうか。

## I 1990年選挙とその開票結果

コートジボワールは、独立以来、30年間、ウフェ・ボワニ大統領の率いる PDCI (コートジボワール民主党 [Parti Démocratique de Côte d'Ivoire]) の一党制を堅持し、アフリカ諸国の間ではもっとも政治的安定を享受してきた国の1つであった。独立前年の1959年4月、自治共和国の立法議会議員選挙において、ウフェ・ボワニの率いる PDCI が既存の他の政治諸勢力の統合に成功し、全議席(100議席)を獲得した(注1)。それ以来、憲法で特にそのための規定を設けたことはなかったが、1990年4月まで PDCI の一党制を堅持してきた。1980年の総選挙からは、それまでの、党が準備した単一の候補者リストに対する信任投票に代わって、国民議会議員選挙、地方自治体議員選挙の場合には複数の候補者の立候補を容認することになったが、PDCI の一党制という枠組だけは保持されてきた。

このような事態の推移のもとで、近年ようやく高まってきた複数政党制移行の要求の声に対し

て、1989年9月に開催された国民各層の代表者との「対話集会」の席上で、ウフェ・ボワニ大統領は、次のように答えている。

「われわれが植民者たちから継承したのは、〈国家〉(Etat)であって、〈国民〉(Nation)ではない。国民形成には長い年月を要する。国民統合は10年や20年で実現できるものではない。フランスはそこに到達するまでに数世紀を要した。われわれの場合は彼らより早く実現できるであろうと私は思う。しかしながら、1人のバウレ(Baoulé)人(コートジボワールの一部族でウフェ・ボワニはこの部族出身——引用者注)が自分をバウレ人とみなすまえにイボワール人であると意識するまでには、今日まだ至っていない。それは他の60の部族についても同様である。……(中略)……

われわれの親愛なる友人エテ(Etté)氏(複数政党制移行の提唱者の1人、高等教育教員組合書記長。ギニア湾沿岸のジャックヴィル[Jacqueville]市出身——引用者注)は、熱烈な複数政党制主義者である。もう1人、グバグボ(Gbagbo)氏(1982年の学生ストの指導者で、その後88年秋までパリで亡命生活。中西部のガニョア[Gagnoa]市近郊のベテ[Bété]族出身。後述するように1990年大統領選に出馬——引用者注)もそうである。私は彼らに挑戦を試みたい。友好的な全く敵意のない挑戦である。まもなくわれわれは総選挙を迎える。エテ氏にはガニョア市に、グバグボ氏にはジャックヴィル市にそれぞれ行ってもらおう。彼らは票を集められないどころか、立候補さえできないであろう」(注2)。

つまり、ウフェ・ボワニ大統領は複数政党制への移行を時期尚早として一蹴したのである。なぜ時期尚早かといえば、複数政党制の前提条件とな

るべき国民が、コートジボワールには未だ形成されていないとウフェ・ボワニは判断するからである。そのような状況のもとで、複数政党制の導入は部族的基盤に立つ部族主義政党の林立を結果し、それらの間の政治抗争は、コートジボワール国家そのものの存立を危機にさらしかねないというわけである。

しかし現実の事態の推移としては、このウフェ・ボワニの演説からわずか6カ月後に、コートジボワールは複数政党制への移行を決定することになった。すなわち、1990年2月、いわゆる構造調整政策の一環として政府が公務員等の給与引き下げを骨子とする国家財政再建案を発表するや、これに反対する抗議行動がアビジャン市を中心に展開され、コートジボワールは建国以来最大の政治危機に直面する。その最中、同年4月30日、ウフェ・ボワニ政権は事態收拾策の1つとして複数政党制への移行を決定したのである。そして同年5月6日には、かねてから複数政党制へ移行を主張し、ウフェ・ボワニ演説でもその名をあげられたローラン・グバグボの率いるFPI(イボワール人民戦線[Front Populaire Ivoirien])ほか2党が公認されたのをかわきりに、その後、20を超える政党が続々と名乗りをあげ公認された。

かくして1990年秋に行なわれた独立以来第7回目の総選挙は、はじめて複数政党制のもとで実施されることになったのである。投票は10月28日の大統領選挙をかわきりに、11月25日に国民議会議員選挙、12月30日には地方自治体議員選挙と3度に分けて行なわれた。

すでに述べたように複数政党制移行の決定を受けて、1990年5月以降、20を超える政党が名乗りをあげていたわけであるが、実際にこの総選挙で候補者を擁立し選挙戦にのぞんだ野党の数は、も

っとも多かった国民議会議員選挙の場合でも18にとどまった。PDCI の一党制のもと、いわば無風状態の中で行なわれた過去6回の総選挙と異なり、はじめて複数政党の立候補者が競う選挙ということで、選挙運動が過熱し、また投票管理上の不手際などもあって若干の混乱が発生したものの、投票、開票とも無事終了した。

以下、この総選挙の結果を、前記のウフェ・ボワニ大統領の時期尚早論を念頭におきつつ分析してみよう。

### 1. 大統領選挙

政府与党PDCIからは、結局、ウフェ・ボワニ大統領が85歳の高齢をおして7選をめざして立候補することになった。他方、野党側ではFPIのグバグボ書記長が2、3の他の野党の支持を取りつけてただ1人立候補しただけで、大統領選挙は両候補の一騎打となった。5年前の大統領選挙では、もちろん対立候補はなく、新聞発表(注3)によれば投票率99.98%、前代未聞の100%という極限

の得票率(351万6542票)を獲得して信任されたウフェ・ボワニにとっては、情勢の激変であった。

結果は、第1表にみるようにウフェ・ボワニが81.7%の支持票を獲得して7選を果たした。しかし、30年間にわたる一党体制ののち複数政党制へ移行し、その移行後わずか半年たらずで、しかも従来の選挙制度を踏襲してこの選挙が実施されたということ勘案するならば、約55万票(18.3%)の支持票を獲得したグバグボ候補は、予想以上の善戦であったと言えよう。グバグボ候補の得票率は、法定得票率10%を優に上回り、2000万CFA<sup>3)</sup>(邦貨換算約1000万円)の供託金の没収も免がれた。この高額の供託金制度は、大統領選挙直前に、PDCI一党制の国民議会で野党候補封じ込め策として、突如可決され制定されたものであった。

グバグボ候補は、1990年10月30日の中間発表(開票率77.2%、121選挙区)(注4)の段階で出身地のガニョア県(4選挙区)をはじめ、全国157選挙区

第1表 1990年総選挙の開票結果

	有権者数 (人)	投票者数 (人)	B/A ×100 (%)	有効投票 数	得 票 数					
					票 数 (E)	E/D ×100 (%) (F)	票 数 (G)	G/D ×100 (%) (H)	票 数 (I)	I/D ×100 (%) (J)
	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(H)	(I)	(J)
I 大統領選挙										
中間発表 <sup>1)</sup> (開票率77.2%)	3,403,396	1,896,684	55.7	1,839,962	1,396,650	75.9	443,312	24.1	—	—
最終結果 <sup>2)</sup>	4,408,809	3,048,964	69.2	2,993,806	2,445,365	81.7	548,441	18.3	—	—
II 国民議会議員選挙 <sup>3)</sup>										
	4,646,962	1,869,929	40.2	1,844,741	1,328,631	72.0	375,284	20.3	140,826	7.6
III 地方自治体議員選挙 <sup>4)</sup>										
獲得自治体数		PDCI	FPI	無所属	計					
		124	6	3	133					

(出所) 1) *Fraternité Matin*, 1990年10月30日(全国157選挙区中、121選挙区についての選挙区別得票結果中間発表より筆者作成)。

2) 同上紙 1990年11月8日。

3) 同上紙 1990年11月28日(立候補者別得票数一覧より筆者作成)。

4) 同上紙 1991年1月2日。

中、13の選挙区でウフエ・ボワニを上回る票を獲得した。予想外であったのは、アビジャン市に隣接するアゾペ (Adzope) 県の6選挙区とアビジャン県アレペ (Alépé) 郡での勝利であった。第Ⅲ節で詳述するように、アゾペ県はアビジャン県アレペ郡を含めて部族的にはアキエ (Akié) 人の居住地域である。この結果が予想外の衝撃であったことは、大統領選挙の直後の11月6日、アキエ人の各界代表者600名がウフエ・ボワニ大統領の私邸を訪問し、選挙結果について遺憾の意を表したことからもうかがいしれる。

## 2. 国民議会議員選挙

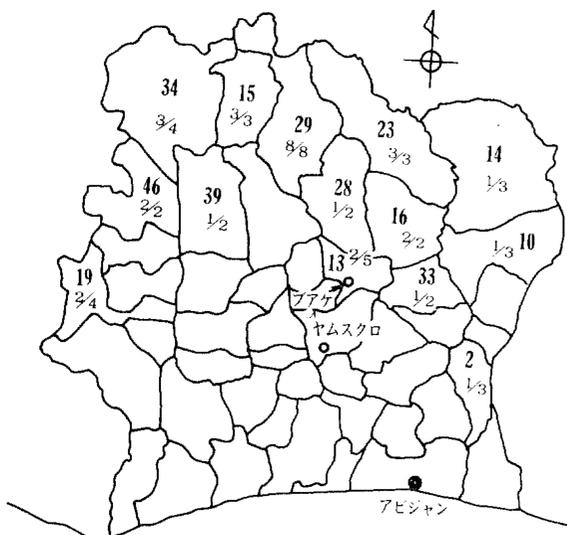
大統領選挙の4週間後、1990年11月25日に行なわれた国民議会議員選挙においても、グバグボの率いるFPIは、大統領選挙でのグバグボ票を上回る得票率20.3%を獲得し善戦した。しかし後述するように現行の選挙制度が不利に働いて議席数では、175議席中、9議席を獲得するにとどまった(第2表)。

国民議会議員選挙では、FPI以外の諸野党も候補者を各地で擁立して選挙戦にのぞんだが、第2表にみるように全国157選挙区中、98選挙区に112名の候補者を送りこんだFPIと比較すると、他の17の政党の規模はきわめて小さく全国的な基盤も有していないことが、この選挙を通じて明らか

になった。FPIを除く野党17政党のうち最大で、アビジャン市のココディ(Cocody)選挙区で委員長フランシス・ウォディエ(Francis Wodié)が当選したPIT(イボワール労働者党[Parti Ivoirien des Travailleurs])でも、28選挙区に34名の候補者を擁立したにすぎなかった。得票率も、PIT以下17党の合計でもわずか4.9%にとどまった。

全国157選挙区は、原則として1区定員1名の

第1図 1990年国民議会議員選挙におけるPDCIのみが複数候補者を立てた選挙区の地理的分布



(出所) 第2表1)と同じ。

(注) 太数字は県No.(第4表参照)。細数字は分母が県内選挙区数、分子が立候補選挙区数を示す。

第2表 1990年国民議会議員選挙結果

	PDCI	FPI	PIT	USD	PSI	PRCI	その他 (13党)	無所属	合計
1. 立候補者数 <sup>1)</sup> (人)	238	112	34	21	8	20	22	36	491
(選挙区数)	(157)	(98)	(28)	(19)	(8)	(19)	(21)	(29)	(157)
2. 当選者数 <sup>2)</sup> (人)	163	9	1	0	0	0	0	2	175
3. 得票数 <sup>2)</sup>	1,328,631	375,284	37,114	28,643	7,650	5,337	11,267	50,815	1,844,741
(得票率, %)	(72.0)	(20.3)	(2.0)	(1.6)	(0.4)	(0.3)	(0.6)	(2.8)	(100.0)

(出所) 1) 第1表と同じ、1990年11月17~18日(立候補者一覧より筆者作成)。

2) 第1表3)と同じ。

(注) PIT(イボワール労働者党)、USD(社会民主同盟)、PSI(イボワール社会党)はFPI派、PRCI(コートジボワール共和党[Parti Républicain de Côte d'Ivoire])は親PDCIの立場に立つ。

第3表 1990年国民議会議員選挙における複数定員選挙区の党派別得票率

選挙区名	選挙区 No.	定員 (人)	PDCI		FPI		その他	
				得票率(%)		得票率(%)		得票率(%)
Abobo	1	2	○	63.3	×	36.0	×(PPI)	0.7
Adjame	2	2	○	68.1	—	—	×(USD)	31.9
Yopougon	10	2	○	52.0	×	44.7	×(PIT) ×(PRCI)	2.4 0.9
Beoumi	40	2	○	100.0	—	—	—	—
Bondoukou	45	2	○	75.7	×	24.3	—	—
Bouake	54	5	○	77.2	×	17.2	×(PIT) ×(無所属)	2.0 3.6
Daloa	69	2	○	60.5	—	—	×(USD) ×(PSI)*	39.5
Divo	83	2	×	48.6	○	51.4	—	—
Gagnoa	91	2	○	58.8	×	41.2	—	—
Korhogo	103	2	○	100.0	—	—	—	—
Soubre	137	2	○	56.1	×	41.0	×(USD)	2.9
Tiassale	145	2	○	83.6	×	16.4	—	—
Toumodi	148	2	○	100.0	—	—	—	—
Yamoussoukro	151	2	○	100.0	—	—	—	—
Tiébissou	155	2	○	96.4	×	3.6	—	—
計 (人)		33	31		2		0	

(出所) 第1表3)と同じ。

(注) \*連合。○印は当選。×印は落選。—印は立候補者なし。

小選挙区制である。例外的に定員2名の選挙区が14、さらに人口規模でアビジャン市につぐ大都市であるブアケ (Bouake) 市だけが5名定員となっている。しかしこれら15の複数定員選挙区でも、各党派は定員に見合った候補者リストを提出し、党派別の得票数で1位になった党派がその選挙区的全議席を獲得するという方式であった。そもそも小選挙区制が、少数派野党にとっては不利であるのに、この方式はさらにそれを倍加するものであった。事実、4つの2名選挙区でFPIは40%以上の得票率であったにもかかわらず、獲得した議席はわずかに1選挙区の2議席のみであり、ブアケ市では77.2%の票を得たPDCIが5つの議席を独占する結果となった(第3表)。

FPIをはじめとする野党、無所属が候補者を1

名も立てなかった選挙区が40区あり、それらではPDCIが無競争で当選する(それでも投票は行なわれた。11選挙区14名)か、PDCIの複数の候補者(最高1名の定員に6名の候補者)が議席を争うという、1980年選挙から導入された方式そのままの選挙となった。後者のようなかたちの選挙が行なわれることになった選挙区は、29あった。その地理的分布(第1図)をみると、コロゴ(Korhogo)県8選挙区をはじめとして、北部に偏在していることがわかる。これらの選挙区では、地域内の対立が〈PDCI〉対〈FPI以下の野党〉という全国レベルの対立にすくい上げられることがなかったということの意味している。

また他党からの立候補があったにもかかわらず、PDCIから定員を超える複数の候補者が立候

第4表 1990年国民議会議員選挙における県・党派別得票率

県名	選挙区数	定員(人)	立候補者数(人)					当選者数(人)		投票率(%)	得票率 <sup>2)</sup> (%)		
			計	PDCI	FPI	その他	無所属	PDCI	FPI他		PDCI	FPI	その他 <sup>3)</sup>
1 Abidjan (市)	10	13	46	14	11	19	2	11	2(T,無) <sup>1)</sup>	29.9	58.0	30.3	11.7
同 (郡部)	10	10	34	10	10	10	4	10	0	41.6	58.1	31.1	10.8
2 Abengourou	3	3	10	4	2	4	0	3	0	28.2	61.1	18.6	20.3
3 Aboisso	4	4	11	4	4	3	0	1	3(F) <sup>1)</sup>	36.9	74.7	21.5	3.8
4 Adzope	6	6	24	6	6	11	1	6	0	44.8	42.4	39.5	18.1
5 Agboville	4	4	14	4	3	4	3	4	0	45.1	57.6	22.7	19.7
6 Agnibilekrou	1	1	2	1	1	0	0	1	0	43.3	80.9	19.1	—
7 Bangoro	1	1	3	1	1	1	0	1	0	44.9	53.9	44.3	1.8
8 Beoumi	2	3	3	3	0	0	0	3	0	45.0	100.0	—	—
9 Biankouma	2	2	7	2	2	3	0	2	0	45.1	66.4	30.5	3.1
10 Bondoukou	3	4	9	5	3	1	0	4	0	42.6	74.8	25.2	0
11 Bongouanou	4	4	12	4	3	4	1	4	0	36.6	68.8	15.6	15.6
12 Bouaffle	3	3	10	3	3	2	2	3	0	48.2	82.0	15.4	2.6
13 Bouake (市)	1	5	20	5	5	5	5	5	0	31.9	77.2	17.2	5.6
同 (郡部)	4	4	9	7	0	1	1	4	0	45.3	99.7	—	0.3
14 Bouna	3	3	8	5	2	0	1	3	0	27.7	68.4	6.0	25.6
15 Boundiali	3	3	8	8	0	0	0	3	0	56.2	100.0	—	—
16 Dabakala	2	2	5	5	0	0	0	2	0	48.6	100.0	—	—
17 Daoukro	2	2	4	2	2	0	0	2	0	78.9	99.3	0.7	—
18 Daloa	5	6	15	6	3	5	1	6	0	34.6	61.0	21.8	17.2
19 Danane	4	4	11	8	3	0	0	4	0	37.7	79.9	20.1	—
20 Dimbokro	4	4	6	4	2	0	0	4	0	55.4	92.5	7.5	—
21 Divo	5	6	19	7	6	4	2	4	2(F)	31.8	55.1	38.3	6.6
22 Duekoue	1	1	4	1	1	1	1	0	1(F)	41.0	38.0	39.1	22.9
23 Ferkessedougou	3	3	10	10	0	0	0	3	0	55.5	100.0	—	—
24 Gagnoa	4	5	13	5	5	1	2	2	3(F)	46.3	42.0	57.1	0.9
25 Grand-Lahou	1	1	3	1	0	1	1	1	0	73.5	89.7	—	10.3
26 Guiglo	3	3	8	3	3	2	0	3	0	45.5	55.9	29.9	14.2
27 Issia	2	2	7	2	2	3	0	2	0	44.4	54.5	43.5	2.0
28 Katiola	2	2	8	7	0	1	0	2	0	36.7	89.1	—	10.9
29 Korhogo	8	9	25	25	0	0	0	9	0	52.2	100.0	—	—
30 Lakota	2	2	5	2	2	0	1	2	0	50.0	51.6	47.5	0.9
31 Man	5	5	12	5	5	2	0	5	0	44.5	65.4	33.4	1.2
32 Mankono	3	3	8	3	2	1	2	3	0	46.3	78.1	5.9	16.0
33 M'bahiakro	2	2	4	3	0	0	1	2	0	54.0	77.5	—	22.5
34 Odienne	4	4	12	10	1	0	1	3	1(無)	52.0	83.9	0.2	15.9
35 Oume	2	2	6	2	2	2	0	2	0	39.8	71.0	23.7	5.3
36 Sakassou	1	1	1	1	0	0	0	1	0	85.8	100.0	—	—
37 San-Pedro	2	2	5	2	2	1	0	2	0	24.0	64.3	35.2	0.5
38 Sassandra	2	2	5	2	2	1	0	2	0	26.9	68.4	31.0	0.6
39 Seguela	2	2	7	5	1	1	0	2	0	40.2	90.9	2.7	6.4
40 Sinfra	1	1	2	1	1	0	0	1	0	37.5	73.3	26.7	—
41 Soubre	2	3	8	3	3	2	0	3	0	35.8	56.0	40.5	3.5

県名	選挙区数	定員(%)	立候補者数(人)					当選者数		投票率(%)	得票率 <sup>2)</sup> (%)		
			計	PDCI	FPI	その他	無所属	PDCI	FPI他		PDCI	FPI	その他 <sup>3)</sup>
42 Tabou	1	1	2	1	1	0	0	1	0	24.5	79.0	21.0	—
43 Tanda	4	4	9	4	2	3	0	4	0	52.0	75.1	5.2	19.7
44 Tengrela	1	1	2	1	1	0	0	1	0	33.9	73.1	26.9	—
45 Tiassale	1	2	4	2	2	0	0	2	0	34.1	83.6	16.4	—
46 Touba	2	2	6	6	0	0	0	2	0	41.4	100.0	—	—
47 Toumodi	1	2	2	2	0	0	0	2	0	65.8	100.0	—	—
48 Vavoua	2	2	8	2	2	2	2	2	0	32.1	60.3	24.9	14.8
49 Yamoussoukro	5	7	9	7	0	2	0	7	0	63.3	99.2	—	0.8
50 Zuenoula	2	2	6	2	0	2	2	2	0	52.5	71.4	—	28.6
計	157	175	491	238	112	105	36	163	12	40.2	72.0	20.3	7.7

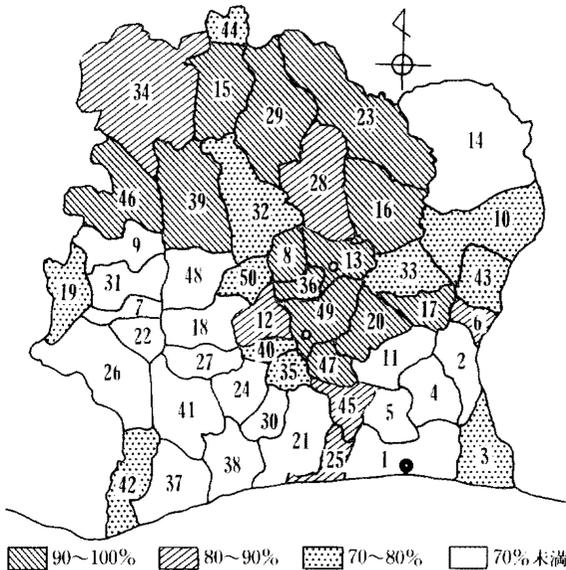
(出所) 第1表3)と同じ。

(注) 1) (F)はFPI, (T)はPIT, (無)は無所属。 2) 得票率は、ここでは投票数ではなく有効投票数を100とした比率。 3) 無所属を含む。

補した選挙区が3つあった。これはPDCIが1つの政党であるとはいえ、30年にわたる一党制のもとで、党組織の統率力がかなり弛緩してきていることを物語っている(注5)。

次に全国157選挙区を県別にまとめて各党の得票数をみよう(第4表)。第2図はPDCIの得票率の高かった県、第3図はFPIの得票率が高かった

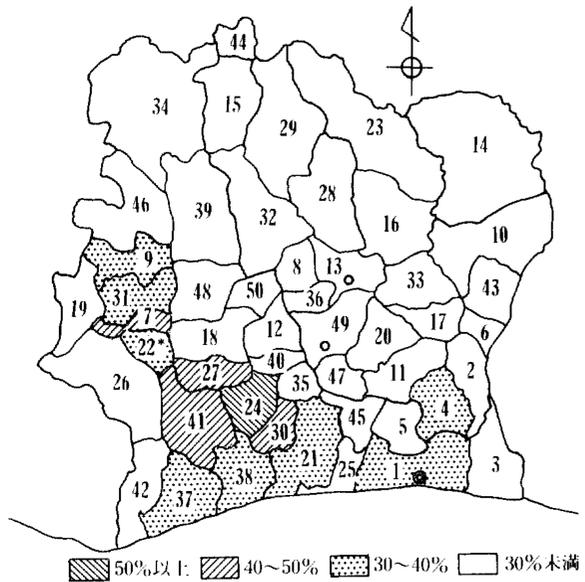
第2図 1990年国民議会議員選挙におけるPDCI高得票率県の地理的分布



(出所) 筆者作成。

(注) (1)数字は県No。(2)1のアビジャン県アビジャン市は70%未満, 13のブアケ県ブアケ市は, 70~80%。

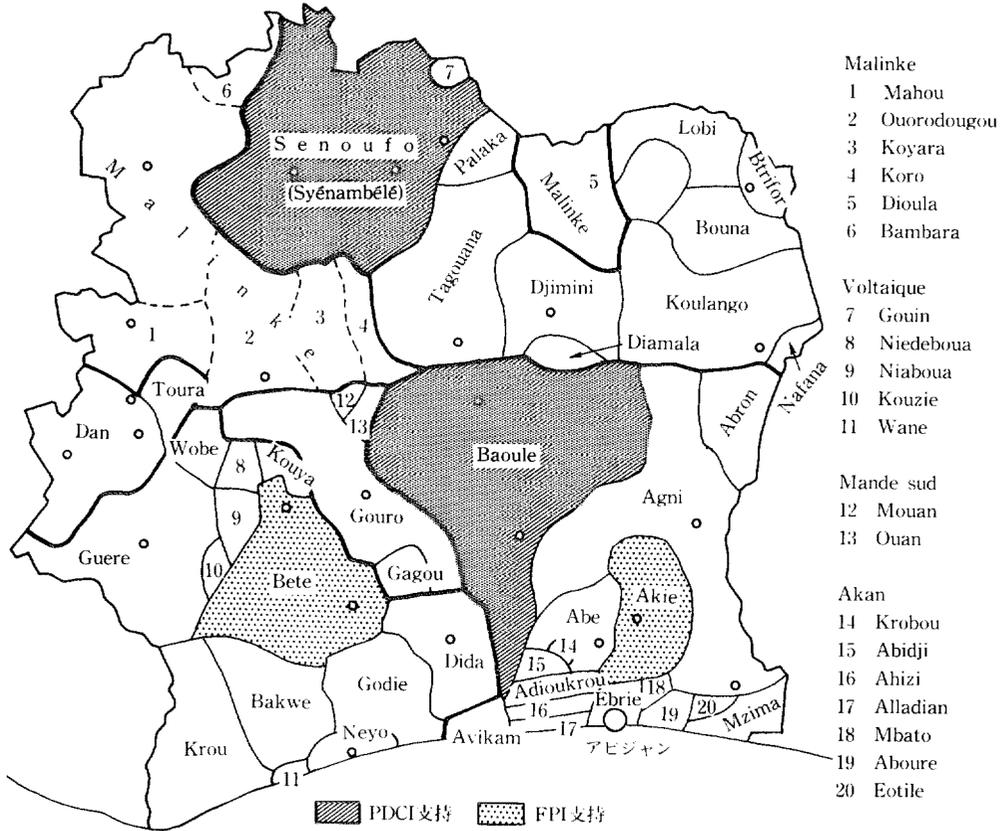
第3図 1990年国民議会議員選挙におけるFPI高得票率県の地理的分布



(出所) 筆者作成。

(注) (1)数字は県No。(2)\*22は39.1%ながらPDCIの38.0%に勝ちFPIの候補が当選。(3)1のアビジャン県アビジャン市は30~40%, 13のブアケ県ブアケ市は30%未満。

第4図 コートジボワールの部族分布



(出所) Marguerat Yves, *Des Ethnies et des Villes*, パリ, ORSTOM, 1979年, 4ページ。

県をそれぞれ示したものである。

第2図は、PDCI が FPI 以下の新興勢力の挑戦を受けることになった今回の選挙で、ゆるぎない強さをみせたのは中部から北部にかけてであることを示している。これは、部族的にはウフェ・ボワニの出身部族パウレと、ボルタ (Volta) 語系のセヌフォ (Sénoufo) 人の居住地域とほぼ重なっている (第4図)。

他方、第3図は同様に FPI の支持が高かった諸県を図示したものであるが、それらは大統領選挙の場合と同じくグバグボ書記長の出身地ガニョア県とその周辺、それにアゾベ県、アビジャン県 (市および郡部) であった。これは、部族的にはグ

バグボ書記長の出身部族ベテの居住地域およびアキエ人の居住地域とほぼ重なっている。ただし、FPI の場合は、最高のガニョア県でも、得票率は57.1%にとどまり、それ以外に50%を超えたところはない。

### 3. 地方自治体議員選挙<sup>(注6)</sup>

1990年12月30日に実施された地方自治体議員選挙は、国民議會議員選挙の際の複数定員選挙区の場合と同様に、人口規模に比例して定められた、小は25名から大は50名の定員に見合った候補者リストを各党派が提示し、それらの中で得票数を競うかたちで行なわれた。

133自治体で行なわれたこの選挙で、PDCI は

すべての自治体で1つないしは複数の候補者リストを提出した。これに対して、野党側が単独で候補者リストを提出したのは、FPIの22自治体とPITの1自治体だけであった。その他では、PIT, USD(社会民主同盟[Union Socialiste Démocratique]), PSI(イボワール社会党 [Parti Socialiste Ivoirien])の3党がFPIとの連合を形成し、それぞれ1つの自治体に1組の候補者リストを提出した。ここでも野党側では、FPIが他の諸政党とは比較にならない大きな力を有していることがわかる。

選挙の結果はPDCIの圧勝に終わり、124自治体の全議席を独占し、FPIが勝利をおさめたのはわずか6自治体にとどまり、その他の3自治体では無所属グループが全議席を獲得した(第1表)。FPIが勝利した自治体の地理的分布をしてみると、大統領選挙、国民議会議員選挙でFPIが善戦したアゾベ県(第3図4)の5自治体のうち3つ、グバゴボ書記長の出身地、ガニョア県(第3図24)の3自治体(うち1自治体では手続問題で紛糾し、後日、再選挙となる)のうち1つ、そのほかはボングアヌ(Bongouanou)県(第3図11)のボングアヌ市、ディボ(Divo)県(第3図21)のヒレ(Hiré)市であった。大まかに言えば、FPIは国民議会議員選挙でのFPIの勢力範囲を大幅に縮小したかたちの結果に終わったのである。

(注1) Bakary, T., "Elite Transformation and Political Succession," I.W. Zartman; C. Delgado, *The Political Economy of Ivory Coast*, ニューヨーク, Praeger, 1984年, 21~56ページ。

(注2) *Fraternité Matin*, 1989年9月29日。

(注3) 同上紙 1985年10月29日。

この得票率100%という発表について、国際ジャーナリズムはこの極限的数値に注目せず、単にウフェ・ボワニの圧倒的自信による再選の事実のみを報じた。

(注4) 同上紙 1990年10月30日。

この中間発表ののち、最終結果については、両候補

の総得票数の発表のみで、各選挙区ごとの得票数については公表されなかった。

(注5) これら3選挙区のうち、1区では2名のPDCI候補者のうち1名が立候補を取り下げ、もう1区の場合にはFPIも2名の候補者を出し、結局、いずれの選挙区でもPDCIが議席を獲得した。

しかし、PITがただ1人の当選者(ウォディエ委員長)を出した、アビジャン市ココディ選挙区では、元外相ユシェール(Usher)と若手のJ・コピナ(J. Kobina)の2名がPDCIから立候補し、両人とも敗退した。各候補の得票数は以下のとおりであった。

ウォディエ(PIT)	7,626票
コピナ(PDCI)	5,961票
ユシェール(PDCI)	4,034票

(注6) 以下、開票結果については、前掲紙 1991年1月2日による。

## II PDCI と部族主義

独立以来、はじめて複数政党制のもとで行なわれた1990年選挙の開票結果は、第I節で紹介したウフェ・ボワニ大統領の複数政党制移行時期尚早論との関連でどのように評価できるであろうか。

ウフェ・ボワニ大統領の時期尚早論に対して、1990年春の複数政党制移行の推進者の1人であるFPIのグバゴボ書記長は、複数政党制について次のように述べている。

彼はまず歴史的事実として、コートジボワールの政治上、1945年から59年までは複数の政党が存在し、かつそれが部族間抗争をもたらすということもなかったことを指摘する。次に彼が主張しているのはコートジボワールという国の部族構成の特殊性である。

「わが国のような国で、部族的な基盤にもとづいて、1つの政党を結成しようとするような、無能な政治家が存在するだろうか。わが国の各部族の規模はいずれも小さく、だれもそれ

を跳躍台として利用しようなどとは考えないであろう。その点、ナイジェリア、ザイール、ルワンダ、ブルンジなどでは、全人口に比していくつかの部族がもしその気になれば、国政の水準で重きをなすことができる規模を有している。(中略)コートジボワールの人口は約1000万だが、もっとも大きな部族でもその人口は90万ぐらいである。このぐらいの規模で何かできるというのか、何もできない。

したがって私は、この国には部族的抗争の危険は存在しないと考える。このことは、個人が部族主義的行動をとらないということを意味してはいない。もちろん、部族主義的行動をとる、それに満足している人々がたくさんいる。しかし、この国ではそれを望んでも、1つの部族を基盤にし、他の部族を犠牲にして、その部族の要求を満足させることを目的として政治を行なうことはできない、と私は言いたいのである。部族的抗争の危険は存在していない。それを振りかざし、誇張し、民主主義に対する恐れからひそかにそれを望んでいるのは権力である」(注1)。

グバグボが指摘しているように第2次世界大戦後の独立運動期、コートジボワールには複数の政党が存在していたことは事実である。しかし、この時期の政治活動は、植民地体制からの脱却、独立という至上命題のもとでの活動であり、また宗主国フランスにおける進歩的政治諸勢力の代理戦争的な要素も複数の政党の結成に関与していた。したがって、この歴史的経験は独立以後の国内政治の展開においてウフエ・ボワニの時期尚早論を杞憂としてしりぞける論拠とはなりにくい。

では第2の論拠についてはどうか。コートジボワールの部族構成において、単独で多数派を形成

しうるような人口規模を有する部族は存在していないことは、グバグボが指摘しているとおりでである(注2)。その点で、グバグボが例示したナイジェリアなどに比べれば、コートジボワールでは、複数政党制移行の際に危惧される危険が少ないと言えるかもしれない。しかし多数派を形成しうる部族が存在する国々においても、それが部族であるかぎり、国家権力の担い手はその部族的偏向を露呈することはタブー視されていることも事実である。またコートジボワールでも、単独ではなくとも複数の部族間の連合によって多数派を形成することは、論理的に可能である。

では、コートジボワールでの現実の展開はどうであったのだろうか。

前節で紹介したように、独立以来はじめてFPI以下の野党の挑戦を受けることになった1990年選挙において、PDCIは国民議会議員選挙の得票率でみるかぎり、部族的にはバウレ人およびセヌフォ人の居住地域で、ゆるがぬ圧倒的支持を獲得した。FPI以下の挑戦は、一党制のもとその超部族性を誇示してきたPDCIの表面下に隠れていた部族的偏りを顕在化させたのである。PDCIを基盤として、これまで超部族的な存在として国家権力を掌握してきたウフエ・ボワニ政権は、1990年選挙を通じて少なくともその評価として、部族的な偏りを顕在化させることになったのである。

ウフエ・ボワニ大統領の出身部族であるバウレ人がウフエ・ボワニ大統領およびPDCIに圧倒的支持を表明したことは当然であった。ウフエ・ボワニが自分の部族の出身者であるという部族的紐帯に加えて、彼らはそのことによる恩恵を十分に受けてきた。独立以来、1970年代末までの「ミラクル・イボワリアン」(象牙の奇跡)と称された高度経済成長(注3)の成果は、ウフエ・ボワニの生地

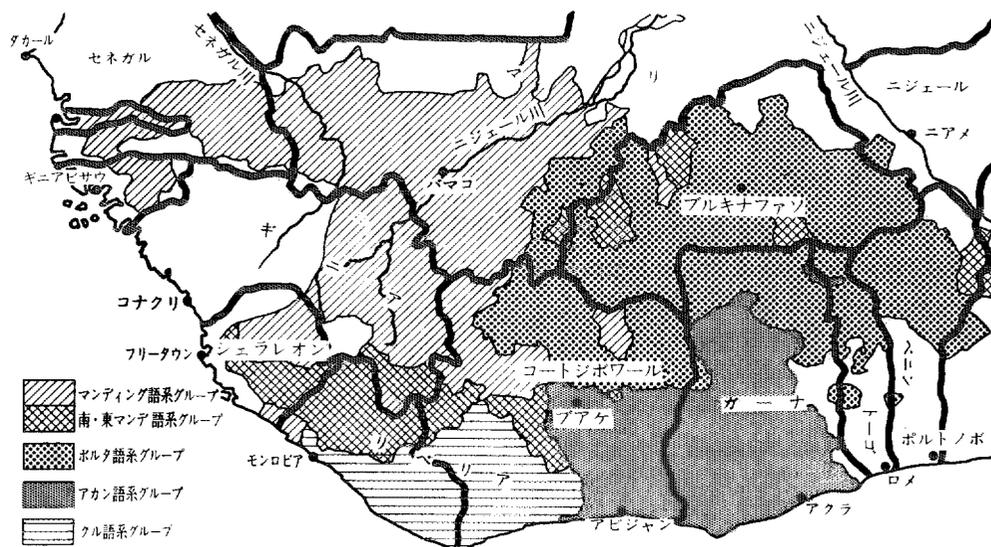
ヤムスクロ (Yamoussoukro) 市を中心に、道路、住宅、学校、保健・衛生施設など社会的間接資本の拡充という目にみえるかたちで結実している。ウフェ・ボワニおよびPDCIを1990年選挙で選択したことは、ほとんどのバウレ人にとっては自らの経済的利益にもかなった合理的選択であった。

ではPDCIのもう1つの強力な支持基盤となったセヌフォ人についてはどうか。

北部のセヌフォ人の居住地域は、1970年代末までの高度経済成長期、ココア・コーヒー栽培の拡大によって活況を呈した南部の熱帯雨林地帯に比較して、開発の過程から相対的に取り残された地域であった。この開発が遅れていた北部に対して、ウフェ・ボワニ政権は国家主導の開発努力を推進してきた。それは、CIDT (コートジボワール繊維開発公社 [Compagnie Ivoirienne pour le Développement des Textiles]) による地元農民に対する綿

花栽培の奨励、拡大<sup>(注4)</sup>とSODESUCRE (砂糖開発公社 [Société pour le Développement des Plantations de Canne à Sucre, l'Industrialisation et la Commercialisation du Sucre]) による砂糖コンプレックス (精糖工場つきの人工灌漑砂糖きび大プランテーションの造成) の建設であった。南部におけるココア・コーヒー栽培の拡大が、主に農民自身の自発的行動による自生的発展であったのに対して、北部の開発の場合には、国家の主導性が強かった。またその成果は、とくに綿花栽培の拡大については成功と評価しうるものであったが、高度経済成長の起動力の役割を果たした、南部のココア・コーヒー栽培の拡大ほどのはなばなしさはなかった。それだけに1980年代に入ってから経済不況の衝撃<sup>(注5)</sup>も、南部のココア・コーヒー栽培農民に比べれば、北部の綿花栽培農民の場合は軽微であった。

第5図 西アフリカの部族分布



(出所) Atlas de Côte d'Ivoire, パリ, ORSTOM, 1971年, B<sub>2</sub>a。

また、北部開発の場合には地元農民の貨幣経済下の更生という程度のものであったので、南部の場合のように開発に吸引された移入民の流入もなく、伝統的な社会構造は外部からの衝撃を受けることなく温存されてきた。

しかしセヌフォ人の場合、ウフエ・ボワニの率いる PDCI に対してバウレ人のように部族的紐帯を見出しうる要素はなかった。植民地化前の歴史の過程で形成されてきたこの地域の諸部族の中にあって、バウレはアカン(Akan)語系グループに属する部族であるのに対し、セヌフォはそれとは全く系譜を異にするボルタ語系グループに属する部族である(第5図)。この点、次節で述べるように、FPI が多くの支持を得たアキエが、バウレと同じアカン語系グループに属する一部族であるのと同対照的である。宗教的にも、セヌフォ人社会ではジュラ(Jula)人の進出、彼らとの接触の影響で、イスラム教がかなり浸透しているのに対して、バウレ人社会ではフランスによる植民地化の過程で、沿岸からカトリックが浸透し、ウフエ・ボワニも熱心なカトリック信者であることは周知のとおりである。このように部族的、宗教的にバウレとは異質なセヌフォ人社会が、PDCI の強力な支持基盤となった理由はどこにあったのであろうか。

それは伝統性の強いセヌフォ人社会の支配者層とバウレ人の象徴であるウフエ・ボワニとの個人的な関係に基礎をおき、その関係が増幅されバウレ=セヌフォ部族連合といえるほどの水準にまで達していたことによる。これに対してグバグボの FPI の本拠となったベテは、セヌフォにとって系譜的には異なるクル(Krou)語系グループに属している部族であるというばかりでなく、地理的にも居住地域が直接に接することなく隔たっており、お互いに疎遠な存在であった。

1990年選挙の際、セヌフォ人居住地域の中心都市コロゴ市の元市長、前国民議会議員のランシネ・ゴン・クリバリ(Lanciné Gon Coulibaly)が FPI から離脱し PDCI へ復帰した事件は、上記の関係を象徴する出来事であった。

大統領選挙ののち、国民議会議員選挙を直前に控えた1990年11月14日、FPI の中心的な指導者の1人、ランシネ・ゴン・クリバリは PDCI への復帰を発表した。

この日、クリバリはウフエ・ボワニ大統領専用の小型ジェット機フォッカーで、「ウフエ・ボワニ一族の代表者たち」とともにコロゴ市に飛来、彼の PDCI 復帰声明の発表のための会場として設営されたデルガム映画館に向かった。冒頭に演壇に立ったボンベ(Bombet)コロゴ県知事(官選)は「セヌフォ人のウフエ・ボワニに対する忠誠」をたたえ、「人間のなすことに完全はありえず、誤りはつきものだ」と述べた。続いてアグボヴィル(Agboville)県選出国民議会議員グニャンス(Gnansou)が立ち、携行してきたウフエ・ボワニ大統領のメッセージを代読した。その中でウフエ・ボワニは、自らが「精神的な父」とあがめたランシネの父<sup>(注6)</sup>との長い深い友情のきずなを強調したのち、「どんな放蕩息子も、人が何と言おうと、へその緒を切りはなすことはなく、ランシネ・クリバリが PDCI という大家族の中に戻り、彼に与えられた地位を占めることになったことは大きな喜びである」<sup>(注7)</sup>と結んだ。

続いてランシネ・クリバリが演壇に立ち、PDCI への復帰を自らの口で聴衆の前で宣言したのである。

1982年の大学紛争以来、クリバリは PDCI から事実上離脱し、グバグボと行動をともにして

きた。そしてこの同じコロゴ市に、革新派4野党(FPI, PIT, USD, PSI)の党首が参集し、「複数政党制民主主義の確立のために協力して活動する」ことを誓った「コロゴ宣言」を発表<sup>(注8)</sup>したのは、わずか5カ月たらず前の1990年6月23日のことであった。コロゴ市でのこの集会を準備したのはクリバリであり、政府当局はこの集会の開催を許可したものの、地元のPDCI派の猛烈な反対のために、彼は自分の邸宅の中庭をその会場にあてたのであった。

復帰宣言ののち、彼は、『フラテルニテ・マタン』紙のインタビューに次のように答えている。

「私はイデオロギー上の対立からFPIを去ったのではなく、自分にとっての自然的環境(milieu naturel)に戻りたかったからである」。

「私は自分の家族のもとに戻りたいのだが、それは正当なことであろう。私は、自分の父であるとみなしている1人の人間、私の実父の偉大な友人の1人であった人間の呼びかけに肯定的に答えるのである」。

「私は、グバグボの活動に深い尊敬の念を抱いている。私が彼にこのニュースを伝えたとき、彼がそれを喜ばなかったことは当然のことである。しかし、彼には私が数カ月前から(大統領と)接触していたことを知らせてあったこともあって、彼はこの日の来ることを予期していた」<sup>(注9)</sup>。

クリバリの発言は、グバグボとの政治イデオロギー上の連帯と部族的紐帯との狭間に立たされることになった一政治活動家の苦渋にみちていた。ウフエ・ボワニの説得の内容は、公表されていないが、それがクリバリに部族的忠誠を迫るものであったろうことは容易に想像がつく。

彼はその説得に屈した。彼の復帰を喜ぶ故郷のセヌフォ人たちに、彼が示しえた唯一の抵抗は、FPIに対する批判的言辭を誘う記者の質問に対して、FPIの活動の正当性、合法性を弁護したこと、また数日後に迫った選挙には出馬しないことを表明したことであった。

とにかく、クリバリのPDCIへの復帰によって、FPIのセヌフォ地域への進出は挫折したと言えよう。逆にこれによってPDCIはセヌフォ人の支持をつなぎとめることができたのである。

このエピソードを通じて一層きわだってくるのは、PDCIの部族主義的性格である。PDCIは、コートジボワール国民を構成する各部族の成員の部族的帰属意識を前提にし、その紐帯に基礎をおいている政党なのである<sup>(注10)</sup>。その党の長であるウフエ・ボワニは、超部族的存在として諸部族の利害関係を調整し、その均衡の上で立って権力を維持しているのである。コートジボワール国民をPDCIの旗のもとに結集させるPDCIのイデオロギーは、部族連合主義であるのだ。したがってそのイデオロギーの性格上、原理的に他の政党の存在を容認できない。それはPDCIにとっては、全国規模で確立した部族連合の崩壊を意味することになる。またすでにみたように、他党の存在は、PDCIの部族的偏りを顕在化させることになる。PDCIは部族連合主義を基盤とする政党であり、それが国家権力をになうとき、その部族的偏りが顕在化することは、まさにその権力にとっては存亡の危機となるのである。

(注1) Gbagbo, Laurent, *Côte d'Ivoire: Histoire d'un Retour*, パリ, Editions L' Harmattan, 1989年, 57ページ。

(注2)

コート・ジボワールの部族構成 (1975年)  
(単位:1,000人, かつこ内%)

ア	カ	ン	
バ	ウ	レ	1,091( 21.0)
ア	ニ	イ	264
ア	キ	エ	227
ア	ジュ	クル	72
計*			2,164( 41.4)
ク	ル		
ベ	テ		463( 9.0)
デ	イ	ダ	164
ゲ	レ		160
計*			872( 16.7)
マ	ン		
マ	リン	ケ	884( 17.0)
ヤ	ク	バ	349
グ	ロ		121
計*			1,309( 25.0)
ボ	ル	タ	
セ	ヌ	フ	663( 12.7)
ク	ラ	ン	114
ゴ			
計*			822( 15.7)
そ の 他			62( 1.2)
総 計			5,229(100.0)

(出所) Derive, M.J.; S. Lafage, "Description sommaire de la situation sociolinguistique de la Côte d'Ivoire," *Cahier ivoiriens de Recherche Linguistique*, 第3号, 1978年4月, 116, 117ページ。  
(注) \*その他の部族も含む。

(注3) コートジボワールの「奇跡的」経済成長については, 原口武彦「コートジボワール経済の奇跡的成長と危機」(『アジア経済』第27巻第5号 1986年5月)を参照のこと。

(注4) CIDTを中核としたコートジボワール北部の開発については, 原口武彦「コートジボワール北部の農村開発——開発公社の役割——」(吉田昌夫編『80年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策』アジア経済研究所 1987年)を参照のこと。

(注5) 1990年10月のココア, コーヒーの集荷期前に, コートジボワール政府は, 世界市場価格の低迷を理由に, 両製品の生産者価格を一挙に2分の1に引き下げた。その経緯については, 原口武彦「コートジボワールのココア・コーヒー問題(その2)」(『アフリカレポート』第10号 1990年3月)を参照のこと。

(注6) ランシネの父は, コロゴ地区のセヌフォの

大首長で, ウフェ・ボワニとは1940年代から親交を保っていた。Siriex, P.-H., *Houphouët, Boigny: an African statesman*, アビジャン, Les Nouvelles Editions Africaines, 1987年, 33~34ページ。

(注7) 前掲紙 1990年11月16日。

(注8) 同上紙 1990年6月25日。

(注9) 同上紙 1990年11月16日。

(注10) 1990年選挙でPDCIが, 西部, ダン(Dan)人居住地域で配布したビラには次のように記されていた。「タンはパウレの同盟者 (alliés) である。パウレはダンの同盟者である。それゆえに, われわれタン人は, PDCIの候補者, フェリックス・ウフェ・ボワニを支持しなければならない。」(1990年11月, コートジボワールへの現地調査の際に筆者が収集)。

### III FPI 台頭の意味

1990年2月からはじまった, コートジボワール独立以来最大の政治危機(注1)の最中, ウフェ・ボワニ政権に複数政党制移行を承認させ, 秋の総選挙では一定の地歩をコートジボワール国民議会に築くことに成功したFPIの台頭は, この国の社会経済的発展が醸成したどのような状況に呼応するものであったのであろうか。

ウフェ・ボワニとFPI書記長, ローラン・グバグボがともに立候補の手続きを終え, この2人の大統領選挙立候補者の名が, 新聞紙上に発表(注2)されたとき, ウフェ・ボワニには「ヤムスクロ市在住, 農園主 (planteur)」, グバグボに対しては「アビジャン市在住, 大学教授」という肩書が付されていた。

ローラン・グバグボは1945年生まれであり, 1905年生まれのウフェ・ボワニより40歳も若く, 独立運動の経験も共有していない。歴史学博士の学位を持ち, コートジボワール国立大学に籍をおいている。すでに大学在学中の1969年に15日間, アビジャン市で高校教師を務めていた71年から約2年間, 反政府政治活動の罪にとわれて2度にわたり

獄中生活を経験している。そして1982年2月の大学紛争の際、首謀者とみなされたグバグボは同年4月、パリに逃がれ、以来、88年9月までの6年余、亡命生活を送っていた。1988年9月29日、グバグボがパリから帰国し、ウフェ・ボワニ大統領と会見し、謝罪したことによって両者の間に和解が成立したと、PDCI 機関紙『フラテルニテ・マタン』は報じた<sup>(注3)</sup>。

グバグボは「国外亡命中の私の発言のいくつかは、あなた個人をひどく傷つけることになったことを知った。私はそれらの発言についてあなたに謝罪します」と述べ、ウフェ・ボワニ大統領は、「小鳥は大樹と仲たがいはいることはない。小鳥とはこの若者のことであり、大樹とはコートジボワールのことである」と答えて、グバグボの帰国を歓迎したという。

しかし、その後出版された自著の中で、グバグボは、この会見の設定自体が「私をわなにはめようとしたもの」であったと釈明している。会談直前の打ち合わせの席で、側近から複数政党制の問題は後日のこととしてこの会談では触れないでもらいたいとグバグボは要請された。そのとき会談を中止して席を立つこともできたが、複数政党制の問題について大統領と論じ合う機会を残した方が得策と考え、その会談に応じたのだという<sup>(注4)</sup>。

いずれにしろ、この会談が最終的和解の場とならなかったことは、その後の事態の推移から明らかである。同年11月に開かれたFPIの設立準備会の直後、FPIの活動資金提供者でこの会議にも出席していた実業家のコベナ・アナキ(Kobena Anaky)が逮捕され、グバグボ自身もFPIを解散せよとの圧力をかけられ、その活動を監視された<sup>(注5)</sup>。

このグバグボ自身と彼の活動に陰に陽に加えら

れたさまざまなかたちの当局による政治的抑圧そのものが、彼の複数政党制移行の要求を正当化する客観的根拠を提供している。しかし政治民主化が実現したとき、具体的にはグバグボが率いるFPIが政党として公認され国民の支持を得たとき、FPIはどのようにコートジボワール社会を変革しようと意図しているのであろうか。

グバグボは新興の野党として富の偏在を批判し、より平等な分配、貧困の解消をスローガンとして掲げているが、経済自由主義を標榜するPDCIに対抗して、社会主義的政策をとくに志向しているわけではない。国家の果たすべき経済的役割(具体的にはCSSPPA〔農産物価格支持安定公庫。Caisse de Stabilisation et de Soutien des Prix des Produits Agricoles〕、CFAフラン通貨制度など)について再検討の必要を説いてはいるが、とくにその改革についての具体的な提案がなされているわけではない。経済発展にとって十分な広さの市場を確保するために、西アフリカの経済統合の必要性を主張しているが<sup>(注6)</sup>、その主張は必ずしもこれまでのコートジボワールの政策と相反するものではない。要するに、FPIとPDCIの対立は、少なくとも現段階では経済政策の次元ではあまり明確に現われていない。

グバグボはFPIの支持基盤については次のように述べている。

「まず第1に、イボワール国民は今日、その大多数が都市民である。1958年に全人口の15%にすぎなかった都市人口は今日、約55%に達している。そしてイボワール国民は若い。1980年において全人口の54%は20歳以下であった。1985年では15歳以下の人口が42.6%であるのに対し60歳以上の人口はわずか3.4%にすぎない。

この若年層は、1945年の強制労働の廃止以外

のことに正統性の根拠を求めている。われわれは彼らとともに、この新しい正統性を求めそれを築き上げようとしているのである」(注7)。

グバグボによれば、FPIの支持基盤は都市民であり、若年層である。強制労働の廃止という正統性とは、言うまでもなくウフェ・ボワニ政権の正統性である。1945年、フランス国民議会におけるウフェ・ボワニ法案によるフランス領アフリカ植民地の強制労働制度の廃止、それは独立運動の指導者としてのウフェ・ボワニの功績であり、ウフェ・ボワニ政権の正統性の有力な根拠となってきた史実である。植民地解放、独立運動の指導者としての輝かしい経歴は、独立後30年を経た今日では、政権の正統性の根拠としてはもはや通用しないと、グバグボは主張しているのである。

FPIは都市民、若年層の党と自らを規定しているが、1990年選挙においてそれらの支持を獲得することができたと言えるのであろうか。もう一度、第Ⅰ節で紹介した開票結果をみてみよう。

まず第Ⅰに若い世代の支持を期待したFPIではあったが、ウフェ・ボワニの本拠であるパウレ人居住地域と北部のセヌフォ人居住地域では、その拠点さえ築くことができなかった。PDCIが国民党という装いの下に隠蔽していた強固な部族的支持基盤を顕在化させたものの、その牙城に食い込むことはできなかった。第Ⅱ節で紹介したランシネ・ゴン・クリバリのPDCI復帰のエピソードは、セヌフォ人居住地域におけるFPIの玉砕のエピソードであった。FPIは部族という壁を突き破って、全国的に若い世代の支持を獲得することはできなかったのである。

PDCIがFPIの挑戦を受けてそれまで水面下に隠されていた部族政党的色彩をあらわにした分、FPIも受動的にそのような性格を帯びざるを

えなかった。PDCIにおけるパウレ、セヌフォに対応するものは、FPIの場合、グバグボの出身部族ベテと、東南部のアキエである。しかしこの両部族とFPIとのかかわり方は、PDCIに対するパウレ、セヌフォの場合とは異なる。

ベテ、アキエがFPIの部族的な支持基盤であったとはいえ、その支持率は相対的に低く、ベテの本拠地ガニョア県でもFPIの得票率は57.1%にとどまっている。つまりFPIの場合は、まさに新興勢力にふさわしく、ベテ、アキエを部族全体として取り込んだのではなく、その中に分裂をもたらしたのである。ベテの場合も、アキエの場合も、政治的には依然としてPDCIを支持する勢力と、それに飽き足らずFPIを支持する勢力とに分裂したのである。PDCIに対するパウレ、セヌフォの場合と異なり、部族を単位としての全面的支持ではないのである。

なぜ、ベテ人社会およびアキエ人社会においては、このような分裂がきわだつたかたちで発生しえたのか。それらを裏づける十分な資料は存在しないが、筆者の現地観察(注8)に照らして言えば、この両社会では、とくにアビジャン市に近いアキエ人居住地域では、独立以降の経済発展の過程で、階層分化がかなり進行していることが、その要因として考えられる。

アビジャン市に近いアキエ人居住地域は、独立以前からココア・コーヒー栽培が導入され、今日ではすでにこれ以上の栽培拡大の余地のない段階にまで達している。他方、ガニョア県は、東南部から熱帯雨林地帯を西方に向かって拡大してきたココア・コーヒー栽培の新開地であり、近年ではココア・コーヒー栽培の中心は、この地域に移りつつある。その栽培拡大の過程には、パウレ人を含む多数の移入民が参入してきており(注9)、セヌ

フォ人社会およびパウレ人社会に比べれば、いわゆる伝統的社会構造の変容・再編は、より早くより深く進行しているとみることができる。

ではその変容・再編の過程で、FPI はどのような階層を代表する勢力として台頭してきたのであろうか。長年のPDCIの一党体制下で、最上層のPDCI に対する支持は維持されているものと思われる。大統領選挙の直後、アキエ人の有力者600名が、ウフエ・ボワニ大統領の私邸を訪れ、謝罪したという、第II節に紹介したエピソードはその証左である。

FPI の支持勢力は、このようなPDCI 支持を続ける支配者層に不満を持つ、ココア・コーヒー栽培を経済的基盤として台頭してきた新興の中間層であると考えられる。

第2にFPIがその支持基盤となることを期待している都市民についてはどうか。

1990年春、複数政党制への移行をウフエ・ボワニ政権に決意させる契機となった政治危機の主舞台は、経済的都都、人口230万のアビジャン市であった。前年の秋にココア、コーヒーの生産者価

格の2分の1引き下げを断行した政府は、公務員等の給与引き下げを主な内容とする財政再建案を発表する。これが都市給与生活者の抵抗、反対運動を発生させ、政治危機が醸成されたのである。

この抵抗、反対運動を推進したのは、政府案の対象となった都市給与生活者を中心とする新興都市中間層であった。大統領選挙に立候補したグバグボに付せられた「アビジャン市、大学教授」という肩書は、彼およびFPIの支持勢力を象徴している。国民議会議員選挙のFPI候補者が届け出た経歴も、それを示している(第5表)。FPI候補者112名中、54名(48.2%)は研究・教育関係者であった。当選者9名のうち7名は、グバグボをはじめとして研究・教育関係者である。FPIに限らずコートジボワール国民議会議員には研究・教育関係者が多いのは事実であるが、FPIの場合にはそれがきわだっている。

グバグボが、FPI に対する支持を期待した都市民のうち、アビジャン市の場合でもFPIに票を投じたのは投票者の3割、有権者の1割足らずにすぎなかった(第4表)。その比率は、国家公務員を

第5表 1990年国民議会議員選挙におけるFPI候補者および当選者の経歴

	FPI 候補者 <sup>1)</sup>		国民議会議員当選者 <sup>2)</sup>		
	人	%	人	うち FPI 当選者(人)	%
研究・教育技術者	54	48.2	50	7	28.6
会社経営・役員	8	7.1	15	0	8.6
医師、薬局経営	5	4.5	14	0	8.0
農業	2	1.8	22	1	12.6
法曹関係	4	3.6	9	0	5.1
公務員	1	0.9	9	0	5.1
その他	8	7.1	7	0	4.0
計	30	26.8	49	1	28.0
計	112	100.0	175	9	100.0

(出所) 1) 第2表1)と同じ。

2) 第1表と同じ、1990年11月28日(当選者一覧より筆者作成)。

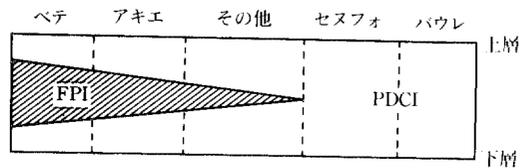
中心とするいわゆるフォーマル・セクターの給与生活者らからなる都市中間層の比率に相当し、アビジャン市民の大多数を構成するインフォーマル・セクターで不安定な生活をしいられている最下層民の支持は得られなかったものと推測される。彼らは、従来どおりPDCI支持に動員されるか、棄権に回ったものと思われる。

以上から、やや仮説的要素も含まれるが、FPIの支持者層は、ベテ・アキエ人居住地の新興のココア・コーヒー栽培農民と、これもまた新興の都市中間層とを考慮することができる。

ではこの2つの支持者層はどのような共通の利害を持ってFPIを支持しているのだろうか。筆者の仮説は、両者は家族的、親族的紐帯で1つに結びついているというものである。ココア・コーヒー栽培で得た資金で子弟の一部を教育し、その子弟が学業修了後、しかるべき安定した職業につき都市で生活するという型の家族ないしは親族集団を見出すことは、コートジボワール、とくにアキエ人居住地では容易である(注10)。しかし都市で生活するそれら教育を受けた子弟の社会的地位は、教育の普及とともに相対的に下降しつつあり、また官僚機構などが整備・確立するにつれて、社会的地位上昇の道がより狭くなりつつあると言わざるをえない。ココア、コーヒーの生産者価格の引き下げは、出身村の親族との紐帯を保持しつつ生活している都市中間層の生活にも、直接、間接に影響してざるをえないであろう。このように都市・農村にまたがって生活の場を有している親族集団の成員がFPIの中核的な支持基盤を形成していると言えるのではなからうか。

さらにここで注目すべきは、コートジボワールにおける部族相互の関係である。ベテがFPIの最大の支持基盤となったことには、FPIの指導者グ

第6図 FPIの台頭とコートジボワールの部族構成



(出所) 筆者作成。

バグボの出身部族であるという部族的紐帯が大きな要因として働いていたものと思われる。ではアキエについてはどうか。アキエは系譜的には、バウレと同じくアカン語系グループに属する一部族である。クル語系グループに属するベテよりは、文化的にはバウレにより親近感を有しているはずである(第4図、第II節(注2)参照)。にもかかわらずアカン語系諸族の枠を破ってかなり多数のアキエ人がベテを支持母体とするFPIの支持に回った理由は何であったのだろうか。

その解答の鍵は、アカン語系諸族の部族間関係にあるように思われる。アカン語系諸族の中にあつて人口的に多数派であり、独立後、ウフェ・ボワニ体制のもとで政治的にも経済的にもその力を増大させてきたバウレに対し、アキエは常に周辺的な存在であった。経済的にもアビジャン市の発展過程で、アキエ人居住地はその周辺化に甘んじてきた。しかも先発のココア・コーヒー栽培地帯として1970年代末まで奇跡的経済成長の一翼をになったという自負もある。アキエ部族主義の立場に立てば、独立以後のコートジボワールの経済発展は、自らに有利に展開してきたとは言えない。自らの努力の果実が国家に吸い上げられ、コートジボワールの他の地域、アビジャン市やヤムスクロ市の都市建設、さらには北部開発に使用され、自らの居住地は、アビジャン市の周辺地域化し、その地位を下落させてきたと言ってよい。

このような、アキエのアカン語系諸族内での部族的地位が、アキエ人社会の PDCI 支持と FPI 支持という政治的分裂の 1 つの要因であったと考えられる。

以上に述べた FPI の台頭とコートジボワールの部族構成との関係を図示すると、第 6 図のようになる。

(注 1) 事態の推移の詳細については、原口武彦「コートジボワールの政治危機」(『アフリカレポート』第 11 号 1990 年 9 月)を参照のこと。

(注 2) 前掲紙 1990 年 10 月 15 日。

(注 3) 同上紙 1988 年 9 月 30 日。

(注 4) Gbagbo, 前掲書, 26 ページ。

(注 5) その詳細については、同上書 15~44 ページを参照のこと。

(注 6) 同上書 47~62 ページ。

(注 7) 同上書 44 ページ。

(注 8) 筆者は、1990 年 10~11 月、90 年選挙について現地調査を実施し、アビジャン県アニャマ (Anyama) 郡アウエ (Ahoué) 村 (アキエ人の村) にて大統領選挙の投票の様態を観察した。村内に 2 つ設けられた投票場のうち 1 つの開票結果は、下記のとおりであった。

有権者数	548 人
投票者数	321 人
有効投票数	316 票
ウフェ・ボワニ	174 票 55.1%
グバグボ	142 票 44.9%

(注 9) もちろん部族別の得票数の集計は行なわれていない。したがってガニョア県の場合、パウレ移入民の多くが部族的連帯からウフェ・ボワニ、PDCI を支持したことは十分に考えられる。

(注 10) 本節 (注 8) で記した筆者のアキエ人村の観察でも、グバグボ支持をはっきり表明していた村民は、このような類型の家族に属していた。

## 結 語

独立以来はじめて複数政党制のもとで行なわれた 1990 年選挙は、コートジボワールの政治史上、

さまざまな意味で画期的な出来事であった。

まず複数政党制の導入によって 1990 年春の政治危機がとりあえず收拾され、秋の選挙は若干の混乱はあったものの無事終了し、合法的枠内で新体制への移行に一応は成功したこと、このこと自体が特筆に値する。隣国リベリア、マリの例<sup>(注 1)</sup>を持ち出すまでもなく、他のアフリカ諸国では政治対立、権力抗争が内戦やクーデタを引き起こし、その收拾に苦慮している状況に照らしてみればなおさらである。

第 2 に 1985 年選挙で 100 歳 という人事とは思えない得票率をもって大統領の座を維持し、「国父」、「神」の座につきつつあった ウフェ・ボワニが、この選挙で 7 選を果たしたものの、グバグボという対立候補の挑戦を受けて、ある 1 つの党派に属する 1 人の人間という地位に引き戻されたこと、この選挙の結果がそのことを内外に客観的に明示したことの意義も大きい<sup>(注 2)</sup>。

第 3 に、この選挙の結果、FPI が 9 議席、PIT が 1 議席とその数は 175 議席のうちのわずか 10 議席にすぎないが、新興野党が国民議会内に地歩を確保したことの意義も大きい。それによって PDCI は絶対多数派とはいえず、一党派の地位に落ち、国家と党との制度的一体化は崩壊した。事実、総選挙後の最初の国民議会の議長選挙もはじめて実質的な意味を持ち、PDCI のコナン・ベディエ (Konan Bedié) 前議長とともに FPI、PIT からも候補が立ち、ベティエが 164 票を獲得して議長に選出されることになった<sup>(注 3)</sup>。

第 4 にこの選挙は、新興野党勢力の進出とともに、PDCI の枠内でも新旧の交代が目立った。175 名の新議員のうち再選議員はわずか 61 名にとどまった<sup>(注 4)</sup>。また、元外相ユシェール、一時はウフェ・ボワニの秘蔵っ子ともてはやされ今回の大統領

領選挙では選挙対策本部長にあたる役割を果たしたドナ・フォロゴ(Dona Fologo)元青年スポーツ相など、PDCIの大物が落選の憂き目をみた。地方自治体議員選挙では、北東部のボンドゥク(Bon-doukou)市(第2図10)で、前社会問題相ヤヤ・ワタラ(Yaya Ouattara)のグループが同じPDCIのもう1つのグループに敗退した。これらの事実、新興野党勢力の挑戦を受けてPDCIの枠内においてもさまざまな動きが活発になりつつあることを示していると言えよう。

このように1990年選挙はコートジボワールの政治体制に新風を吹き込むことになったが、今後の政治の展開にとって、最大の課題となるのは、多部族国家であるコートジボワールの国家権力の正統性の問題であろう。

これまでウフェ・ボワニ政権をささえてきた、ウフェ・ボワニ個人の「独立の父」という正統性の根拠は、グバグボの指摘をまつまでもなく独立30年を迎えた今日、ようやく消滅しつつある。ではこれに代わって、グバグボが模索し築き上げようとしつつあるという正統性の根拠は、いずこに見出すことができるのか。

FPIの台頭は、第III節でみたとおり、ベテ人、

アキエ人社会における階層分化を反映した、これらの部族内の政治的分裂の結果であった。それに対応して、PDCIはその中に潜在していた部族的偏向を露呈させられた。このような錯綜した諸勢力の競合の中で、選挙という民主的手続の枠内にとどまるかたちで、大方の支持を得られる国家権力の正統性を築き上げることができるのであろうか。多部族国家、コートジボワールの国家建設の道は、今日なおますます多難であると言わざるをえない。

(注1) 1989年12月末に勃発したリベリア内戦については、原口武彦「リベリアの内戦」(『アフリカレポート』第12号 1991年3月)を参照のこと。

1991年3月25日、民主化要求デモの弾圧による混乱の最中、クーデタが発生、ムサ・トラオレ政権は崩壊した。

(注2) 大統領選挙公示後もグバグボに対して、立候補を取り下げさせるための働きかけが、ウフェ・ボワニ陣営側からなされたという。Jeune Afrique, 第1566号, 1991年1月2～8日, 24ページ。

(注3) 前掲紙 1990年12月24～25日。

(注4) 同上紙 1990年11月28日。

(アジア経済研究所アフリカ総合研究プロジェクト・チーム・コーディネーター)